

# 思春期男子のやせ志向と自尊感情および体型との関連

池田 かよ子

新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

## Between the Slimness orientation among early Adolescent boys Self-respect and Form

Kayoko Ikeda

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY  
DEPARTMENT OF NURSINGS

### Abstract

In recent years, the research that people who have desire for getting slimmer is increasing among younger generation and not only girls but boys are beginning to have the desire for getting slimmer researched for getting slimmer, is being reported. I considered about desire for getting slimmer researched for the adolescence of males and factors could be related to it. [Objects and Methods] Objects were 691 boys ranging from the fifth year of primary schools to the third year of public junior high schools within a city, from September to October in 2004. [Results] Objects evaluations of their own babies including these who evaluate themselves as “ fat ” or “ pudgy ” are as follows. Pupils 32.4%, Junior high school students 26.1%. Therefore, several pupils evaluate themselves as “ fat ” more than junior high school students. On the other hand, desires of figures are as follows. Pupils 34.2%, Junior high school students: 29.2%. From the results, about thirty percents boys want to become thin. So tendency of desire forgetting slimmer is increasing among younger generation. Denial of one's own body shape in desire for getting slimmer for boys is strongly relevant to self-respect. Also, it is relevant to self-respect between desire for getting slimmer and actual the Loral Index in both pupils and junior high school students.

### Key words

Adolescence boy    Slimness orientation scale    Self-respect    Form

### 要 旨

近年、やせ願望が低年齢化し、女性だけでなく男性にも増えつつあることが報告されている。思春期男子に調査したやせ志向と、それに関連すると思われる要因について検討をした。【対象と方法】2004年9～10月に市内の公立中学1～3年生、小学5～6年の男子691名を対象に自己記入式無記名による調査を行った。【結果】自分の体型の主観的評価は、「少し太っている」「太っている」を合わせると、小学生32.4%、中学生26.1%であり、小学生の方が太っていると評価していた。体型の希望は小学生の34.2%、中学生の29.2%と、約3割が「やせたい」と希望しており、やせ志向が低年齢化していることが伺える。

男子のやせ志向と関連があると思われる要因との関連では、自尊感情と体型への「否定感」に強い関係がみられた。また、やせ志向と実際の体型であるローレル指数との関連では、小学生、中学生全体で体型への「否定感」との関係が有意であり相関がみられた。

### キーワード

思春期男子    やせ志向尺度    自尊感情    体型

## はじめに

現代は痩身が美であり好ましいとされる社会の風潮から、身体体型に敏感な思春期にある子どもたちの中には痩身願望を持ったり、自己の体型に対して実際と違った認識をするなど歪んだボディイメージを持つものが多い<sup>1)</sup>。20歳代女性におけるBMI (Body Mass Index) 18.5未満の「やせ」の割合は、1981年に12.4%であったのが、2001年には20.2%へと著しい増加を示している。また自己の体型を「太っている」或いは「少し太っている」と評価するものが、半数近く占めていた。実際には、ほぼ5人に一人が「やせ」であるにもかかわらず、多くの人が自己の体型を過大評価している<sup>1)</sup>。こうした自己の体型の過大評価傾向は、すでに思春期からみられることが報告されている。また、最近では、誤ったダイエット情報が氾濫している中で、やせ願望が小学生においても増加し、低年齢化している。さらに、やせ願望が女性だけでなく男性にも増えつつあることが報告されている。しかし、思春期、青年期の男子を対象に、やせ志向がどこから派生してくるのかという研究は多くはなく、やせ志向の構造ややせ志向と関連について検討したものは少ない。

そこで、思春期男子が何故やせたいのか、そのやせの構造を明らかにするためにやせ志向尺度の作成を試みた。尺度の作成に当たっては、思春期女子のやせ志向尺度の項目について使用した調査項目を男子にも回答できるように一部改変して調査を実施した。また、やせ志向に関連すると思われる要因については、思春期女子のやせ志向と関連がみられた項目について男子に調査した。その結果、やせ志向尺度の中で体型への否定感が、やせ願望や自尊感情、体型の認識などに密接に関わっていることが明らかになったので報告する。

本研究では「やせ志向」を、成長発達過程の思春期の男子においては、「自己の体重を増やさないようにしたい、あるいは体型をスリムにしたい」というはっきりとした方向性<sup>2)</sup>と定義した。また、「志向」については、「指向」が一般にある方向を目指して向う性質を

さすが、心理学的用語としては「志向」と同義にとる場合があることから「志向」とする<sup>3)</sup>。

## 研究方法

### 1. 調査対象

対象は、新潟市内の公立小学校3校の5、6年生538名、新潟市内の公立中学校1、2、3年生778名であり、本研究では男子のみを分析対象とした。その内訳は、小学校3校に在学する小学5年生146名、6年生139名、中学校2校に在学する中学1年生130名、2年生149名、3年生129名、合計691名であった。有効回答数は小学生284名、中学生407名の合計691名(99.7%)であった。

### 2. 調査時期

2004年9月下旬から10月下旬

### 3. 調査方法

調査方法は、各クラスの担当教員を通じて、授業中に質問用紙を配布し、記述後その場で回収してもらった(回収率100%)。調査所要時間は、約20分であった。尚、質問紙は小学校、中学校の教師に協力を得て、難しいと思われる漢字に振り仮名をつけた。

### 4. 調査内容

#### (1) 思春期男子のやせ志向尺度の作成

尺度の作成に当たっては、思春期女子のやせ志向尺度の項目を男子にも回答できるように一部改変して調査を実施した。

#### (2) 自尊感情および体型について

自尊感情は、Harter (1982) の領域別コンピテンス尺度を日本語に訳した自己価値を用いた<sup>4)</sup>。この児童用コンピテンス尺度は、原版同様に有能さの自己認知を測定し、ほぼ自尊感情に対応するものである。4件法による回答形式で行った。選択肢は、「そう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4件法で問うように設定し、各々4～1点が配されており、得点の高い方を「そう思う」と判定する。

体型については、自己の体型に対する主観

的評価として「やせている」「少しやせている」「ふつう」「少し太っている」「太っている」の5段階とした。希望する体型は「できれば太りたい」「今のままでいい」「やせたい」「すごくやせたい」の4段階とした。さらに実際の体格については、ローレル指数を用い、分類にしたがって判定した。

尚、調査は各クラスの担当教員を通じて、授業中に質問用紙を配布し、記述後その場で回収してもらった(回収率100%)。質問紙は小学校、中学校の教師に協力を得て、分かり難い表現や不適切な内容の検討を行い、また難しいと思われる漢字に振り仮名をつけた。

### 3. 分析方法

分析は、統計ソフトHALWINを使用した。得られたデータに対し、因子分析、一要因分散分析、重回帰分析を行った。

### 4. 倫理的配慮

質問紙調査の実施と回収は各クラスの担任にお願いした。対象への配慮として、調査は無記名であり、回答も自由であること、学習面への影響は全くないことなど、小学生および中学生が理解できるように説明の内容について事前に打ち合わせをした。記入後回収した質問紙は事前に準備した封筒に入れてもらい、さらに収集したデータについては調査の目的以外には使用せず、集計後は破棄することなどの説明も併せてお願いした。

## 研究結果

### 1. 思春期男子のやせ志向について

#### (1) 思春期男子のやせ志向尺度の作成

思春期男子が何故やせたいと思うのか、男子のやせ志向の構造を明らかにするために因子分析を行った。分析方法は、主成分分析、斜交回転(コバミリン法)で、表1に示すとおり意味のまとまりのよい4因子を抽出した。項目は、因子負荷量が0.40以上のものを採用して因子を解釈した。

第1因子は、7項目で、「やせれば、女の子につきあってほしいと言える」「やせれば、女の子とうまく話ができる」というもので

「異性意識」、第2因子は5項目で、「鏡にうつった自分の体型がいやだ」「自分のスタイルに自信がない」というもので体型への「否定感」、第3因子は2項目で、「子どもの体のままでいたい」「ゴツゴツした筋肉のついた大人の男性の体になりたくない」というもので性的成熟への「抵抗感」、第4因子は3項目で、「やせている方がどんな服を着ても似合いそうだ」というものでやせへの「メリット感」と命名した。

#### (2) やせ志向の発達過程

やせ志向尺度の4因子の各要因について、学年によるやせ志向の発達過程を明らかにするために、4因子の各々の尺度得点を算出し、各学年との関係についてそれぞれ一要因分散分析を行った。その結果、第1因子の「異性意識」、第2因子の自己の体型への「否定感」、第3因子の性的成熟への「抵抗感」、第4因子のやせの「メリット感」の年齢による発達の变化をみると、図1に示すように発達段階による明らかな変化はいずれもみられなかった。

### 2. やせ志向と自尊感情について

#### (1) 自尊感情の尺度

やせ志向に関連すると思われる「自尊感情」について尺度の検討を行った。

「自尊感情」の9項目について尺度構成の結果、いずれも総得点との相関は高く( $r = .50 \sim .70$ )、かつ主成分も高かった( $r = .48 \sim .71$ )。係数は、 $r = .79$ であった。

#### (2) 自尊感情の発達過程

「自尊感情」は、10項目の合計点を用いて一要因の分散分析を行った。その結果、図2に示すように、「自尊感情」は中学1年生で最も高く、中学3年生では最も低下していた( $p < .01$ )。

#### (3) やせ志向と自尊感情との関連

やせ志向と関連があると思われる要因として、自尊感情との関連をみた。その結果、自尊感情との関連では、表2のように体型への「否定感」と強い関係がみられた。

表 1 思春期男子のやせ志向尺度の因子分析結果

N = 619

質 問 項 目	1 因子 異性意識	2 因子 否定感	3 因子 抵抗感	4 因子 メリット感	共通性
15 やせれば、女の子からつきあってほしいと言ってもらえる	0.7764	-0.0363	-0.0672	-0.1198	0.627
11 やせれば、女の子につきあってほしいと言える	0.7489	0.0992	-0.0383	-0.0854	0.601
9 やせれば、女の子とつきあうことに不安がなくなる	0.7160	0.1240	-0.0601	-0.2093	0.619
6 やせれば、女の子とうまく話ができる	0.6864	0.0898	0.0655	-0.1328	0.552
4 男らしい体になると人の目が気になる	0.5746	0.3571	0.0389	0.1564	0.485
7 やせていると自信がもてる	0.5129	0.1987	0.0894	-0.2882	0.480
5 やせている方がおとなっぽい	0.4641	0.2325	0.0669	-0.3608	0.497
2 鏡にうつった自分の体型がいやだ	0.1114	0.7815	-0.0207	-0.1204	0.671
16 自分のスタイルに自信がない	-0.0297	0.6837	0.3007	-0.0679	0.580
10 自分の体(腕、足、尻など)で気に入らないところがある	0.2096	0.6655	-0.0613	-0.0812	0.527
1 スタイルをもっとよくしたい	0.2169	0.5994	-0.2672	-0.2717	0.575
19 ひん弱な体だと、体育の授業の時恥ずかしい	0.3228	0.4043	0.0634	0.0970	0.290
8 子どもの体のままでいたい	0.1283	0.0838	0.6575	0.1265	0.467
13 ゴツゴツした筋肉のついた大人の男性の体になりたくない	-0.0324	-0.0848	0.6514	-0.2269	0.515
14 やせている方が体の動きが軽い	-0.0408	-0.0154	0.1719	-0.7012	0.547
3 やせている方がどんな服を着ても似合いそうだ	0.3761	0.1723	-0.1949	-0.5578	0.552
17 やせている方がおしゃれを楽しむことができる	0.3440	0.2991	-0.0622	-0.5349	0.577
12 やせている方がかわいい(かっこいい)	0.4570	0.1666	-0.1013	-0.5483	0.615
18 引きしまった体になりたい	0.0935	0.4836	-0.3127	-0.4083	0.511
20 やせている方が、かわいい(かっこいい)服がきられる	0.5232	0.2294	-0.0950	-0.4906	0.657

因子間の相関係数行列

因 子	1 )	2 )	3 )	4 )
1 )	1.000	0.076	0.131	-0.134
2 )	0.076	1.000	0.019	-0.095
3 )	0.131	0.019	1.000	-0.148
4 )	-0.134	-0.095	-0.148	1.000

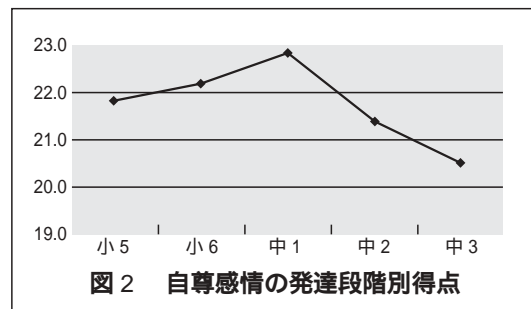
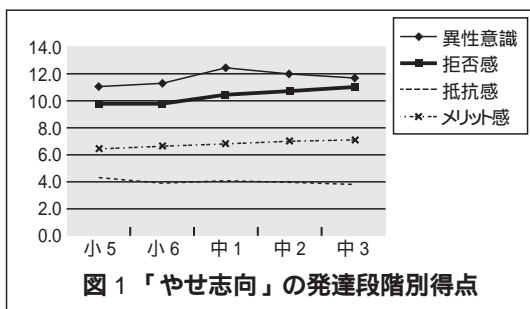


表 2 やせ志向と自尊感情との関連

	自尊感情	N=691
異性意識	-0.06	
否定感	-0.25 * * *	
抵抗感	-0.03	
メリット感	-0.05	

P < . 0 0 1

3. やせ志向と体型について

やせ志向と体型にどのような関連があるのかを明らかにするために、やせ志向と体型との関連、やせ志向とローレル指数(体格指数)との関連について検討した。

(1) やせ志向と体型との関連

1) 自己の体型の主観的評価および希望する体型

自己の体型の主観的評価および希望する体型について、全体をとらえるためにカテゴリ度数を求めた。

自己の体型への主観的評価

自分の体型の主観的評価は、「太っている」「少し太っている」「ふつう」「少しやせている」「やせている」の5段階とし、小学生と中学生とで比較した。図3のように、自己の体型の主観的評価は、「ふつう」と評価している者が、小学生40.1%、中学生42.1%と最も多く、次に「少し太っている」「太っている」を合わせると、小学生32.4%、中学生26.1%であり、小学生の方が太っていると評価していた。

自己の希望する体型

自分の希望する体型は、「すごくやせたい」「やせたい」「今のままでちょうどいい」「できればやせたい」の4段階とし、小学生と中学生とで比較した。図4のように、体型の希望は「すごくやせたい」「やせたい」を合わせると小学生34.2%、中学生29.2%であり、約3割が「やせたい」と希望していた。

2) やせ志向と自己の体型の主観的評価との関連

やせ志向と自己の体型の主観的評価との関連について明らかにするために一要因の分散分析を行った(表3)

やせ志向の「異性意識」「否定感」「メリット感」と体型の主観的評価との関連に有意差がみられた( $p < .001$ ,  $p < .01$ )。体型が「太っている」「少し太っている」と評価している者は、「異性意識」「否定感」「メリット感」を強く感じていた。

3) やせ志向と自己の希望する体型との関連

やせ志向と自己の希望する体型との関連について明らかにするために一要因の分散分析を行った。その結果、表4に示すようにやせ志向の「異性意識」「否定感」「メリット感」と希望する体型との関連に有意差がみられた( $p < .001$ )。このことは、自己の体型の評価と同様に、現在の体型より「すごくやせたい」「やせたい」と思っている者は、「異性意識」「否定感」「メリット感」を強く感じていた。

(2) やせ志向とローレル指数との関連

1) 各学年のローレル指数について

ローレル指数の数値について、小学生と中学生に分けてみると、図5のように「標準」は小学生43.0%、中学生41.7%である。また「やせ気味」は、小学生34.5%、中学生45.0%であることから、それぞれ合わせると、小学生の78.5%、中学生の86.7%が「標準」または「やせ気味」であった。

2) やせ志向とローレル指数との関連

やせ志向と実際の体型であるローレル指数との関連では、表5のように小学生、中学生全体で体型への「否定感」との関係が有意であり、相関がみられた。

小学生と中学生のどちらに関連があるのかをみると、表6のように小学生の方に、体型への「否定感」との関係が有意であり、相関がみられた。

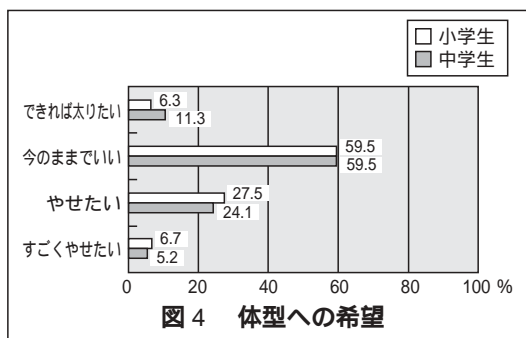
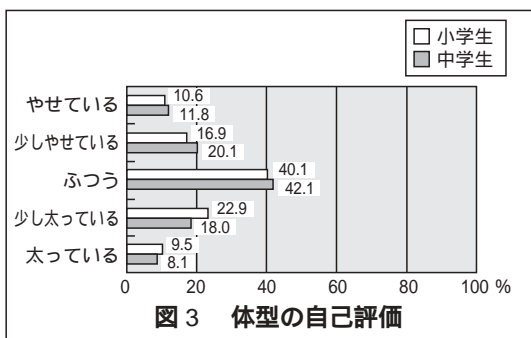


表3 やせ志向と自己の体型との主観的評価との関連

N=690

	太っている 少し太っている n=198	ふつう n=285	少しやせている やせている n=207	F値	群間比較
異性意識	12.8 (5.11)	11.2 (4.40)	11.2 (4.47)	8.57***	ふつう<太っている やせている<太っている
否定感	11.7 (4.08)	9.8 (3.32)	9.9 (3.71)	91.02***	ふつう<太っている やせている<太っている
抵抗感	4.1 (1.54)	4.1 (1.38)	4.0 (1.37)	0.79	やせている<太っている
メリット感	7.3 (2.27)	6.6 (2.51)	6.5 (2.52)	5.76**	ふつう<太っている やせている<太っている

上段は平均値、下段( )内はS.D

\*\* p &lt; .01 \*\*\* p &lt; .001

表4 やせ志向と希望する体型との関連

N=627

	すごくやせたい n=40	やせたい n=176	今のままでいい n=411	F値	群間比較
異性意識	13.0 (6.17)	13.2 (4.72)	11.0 (4.31)	15.56***	すごくやせたい、やせ たい<今のままでいい
否定感	13.1 (4.45)	11.7 (3.62)	9.4 (3.29)	40.60***	すごくやせたい、やせ たい<今のままでいい
抵抗感	3.9 (1.75)	4.2 (1.44)	4.1 (1.38)	0.440	
メリット感	8.2 (3.31)	7.4 (2.53)	6.3 (2.44)	17.94***	すごくやせたい、やせ たい<今のままでいい

上段は平均値、下段( )内はS.D

\*\*\* p &lt; .001

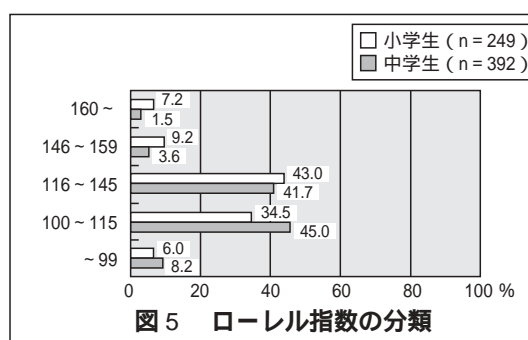


表5 やせ志向とローレル指数との関連

	自尊感情 N=647
異性意識	0.07
否定感	0.13 ***
抵抗感	0.06
メリット感	0.09

P &lt; .001

表6 やせ志向とローレル指数と関連

	小学生 (n=256)	中学生 (n=391)
異性意識	0.14	0.07
否定感	0.25 ***	0.11
抵抗感	0.08	-0.02
メリット感	0.15	0.08

P &lt; .001



## 考察

### 1. やせ志向の検討

本研究は、思春期男子を対象に、思春期女子のやせ志向尺度を用いて調査した。その結果について因子構造を明らかにするために因子分析を行い、思春期男子のやせ志向尺度の作成を試みた。

池田<sup>2)</sup>は、やせ志向の構成概念として、馬場・菅原<sup>5)</sup>の瘦身の「メリット感」が瘦身願望を高めていること、伊藤、鈴木、伊藤の思春期女子の身体発育や性的成熟を反映して、性的成熟への受けとめ方や異性への関心が関係していることから「身体像への不満」「性的成熟への戸惑い」「異性への関心」の4領域と考え、さらに独自に収集した項目も加え調査を行った。その結果、やせ志向尺度がやせの「メリット感」、体型への「否定感」、性的成熟への「抵抗感」「異性意識」の4因子で成り立っていることを明らかにしており、今回の結果においても、思春期男子のやせ志向の構造は、女子のやせ志向尺度の因子構造と比較すると因子間の順位や項目に移動こそみられたが、やせ志向を構成する重要な因子として4領域抽出できたことは、やせ志向について測定できる尺度であるといえよう。

### 2. やせ志向の発達過程

やせ志向の発達の变化については、やせ志向のいずれの因子において発達段階に伴う変化はみられなかった。「異性意識」は、「やせれば、女の子につきあってほしいと言える」「やせれば、女の子とうまく話ができる」であり、体型への「否定感」は「鏡にうつった自分の体型がいやだ」「自分のスタイルに自信がない」というものであり、性的成熟への「抵抗感」は「子どもの体のままでいたい」「ゴツゴツした筋肉のついた大人の男性の体になりたくない」というものであり、やせへの「メリット感」は「やせている方がどんな服を着ても似合いそうだ」というものである。「メリット感」は馬場・菅原<sup>5)</sup>が指摘するように、瘦身のメリット感（「今より痩せられたら何かいいことがある」「今より痩せられたら自信が持てる」）と共通する内容で、瘦身

願望と直接関連する重要な要因である。また、「否定感」や「抵抗感」も、思春期の身体的成熟を契機に自分の身体へ注目が強く向き、今まで慣れ親しんできた身体意識とは違った感覚や理想とする体型と自分の現体型とのギャップ、さらには、やせてスリムな体型が好まれる社会的背景においては、自分の体型への否定的感情が高まる要因となる。「異性意識」は、二次性徴の発現により男性、女性という性を担った自己と認識することになる。それが契機となって異性への関心が高まり、周りからどう見られているという外見のこだわりをもつ。特に、女性（女子）は常に男性の目を意識しながら、自分の身体をとらえ、その結果としてやせ志向に向かっているとみえる。しかし、今回これらの因子において、女子のような明らかな変化がみられなかったことは、いくつかの点が考えられる。

まず、身体的成熟の体験に性差が影響していると思われる。斉藤<sup>8)</sup>は、男子の場合では性的成熟を伴う身体発育の受け止め方が「大人になった」というポジティブな反応が多いとし、男子と女子とで受け止め方に違いがみられることを指摘している。また、深谷<sup>9)</sup>は、やせている人のイメージについて、女子は全般的に肯定的であるが、男子の場合は「運動神経がよさそう」が唯一肯定的な評価であったことから、女子ほどやせていることに対して理想的ではないとしている。さらに深谷<sup>10)</sup>は、男子がやせたい理由としてあげているのは「健康にいいから」「早く走ったりすることができるから」など健康と機能を重視しているが、女子は見た目やファッション性を中心に考えていると報告している。生野<sup>11)</sup>は、男子も女子と同じようにやせる方が美しいという意識はあるが、ただ女子は体重にこだわるが、男子が無駄な脂肪をそぎ落としたいという違いを述べている。このように、「やせ」に対するとらえ方には性差がみられる。女子は、性的成熟に伴ない体型や体重にたいする否定感や抵抗感が強くなっていくが、男子の場合はスポーツ選手や運動能力など、むしろ均整の取れた体型に対する意識が年齢に関係なくあるために、発達段階による変化がなかったのではないかと考える。

### 3. やせ志向と自尊感情との関連

#### (1) 自尊感情の発達過程

思春期における性的成熟のおとずれは、自己の身体を強く意識すると同時に、急速に身体への関心が高まってくる。それにより自分の容貌や体型を過度に気にしたり、他者と比較した自己像に劣等感を持ったり、理想の自己と現実の自己との隔たりに悩んだり、他者と同一視したりする<sup>12)</sup>。特に思春期早期、中期は、自分が人にどのように見えるかということに意識が集中する自己中心的で意識過剰な時期であると述べている。また、梶田は、自尊感情の形成に性差があると指摘しており、男子は、自らの基準に照らして自己を評価しつつ自尊感情を形成していく傾向が強い<sup>13)</sup>のに対し、女子は、他者から評価され受容される過程を通して、自らの自尊感情を形成するという。さらに、自尊感情は、学校段階が進むにつれて大きく低下し、小学生から中学生で著しく、中学生から高校でも進行すると述べており、その傾向は女子に特にみられる。本研究では男子においても、中学1年生が高く、中学3年生で低くなる傾向がみられた。思春期は、自分への関心が高まる時期であり、「見た目」へのこだわりが始まる時期とされている。それだけに自己に対する評価が敏感になっていくといえよう。

#### (2) やせ志向と自尊感情との関連

やせ志向と自尊感情との関連についてみると、自尊感情は、やせ志向の体型への「否定感」との項目において強い負の関係がみられた。このことは、自分の体型の「否定感」が強くなると、自尊感情は低下するという関連が明らかになった。やせ願望の背景については多くの研究がなされており、その中の一つの視点として身体像への不満がある。身体像とは「自己の身体に関する意識全般をいい、具体的には身体に対する満足や不満、身体への関心、身体に対する魅力、頭に思い描いている身体のイメージ」と定義されている<sup>15)</sup>。片山、松橋は、思春期のボディイメージ形成の発達プロセスについて身体部位に分けて、それぞれの部位をどのように意識しているかについて中学生から大学生までみると、男女と

もに年齢の上昇とともに身体意識が高まっていると述べている。また、痩身願望<sup>5)</sup>や摂食障害傾向の研究では、やせ願望の根本に自分の身体意識のとりわれや身体的外見に対する不満などの要因をあげている。これらの指摘から、多くの者が身体像への不満が、痩身願望の根底にあることは否めない。さらに、やせ願望や摂食障害において自己評価が低いことも指摘されている。及川<sup>17)</sup>は、周囲から「太っている」「かっこわるい」などと見られることは、自己の存在価値を否定されるかのような受けとめ方をして、極端に嫌う風潮すら感じると述べており、体型に対する否定的な感情が自尊感情に影響しており、本研究とも一致している。これらより、やせ志向の体型への否定感と自尊感情は密接な関連があることが示唆された。

### 4. やせ志向と体型との関連

#### (1) やせ志向と体型

自己の体型をどうとらえているかという主観的な評価と、希望する体型について検討した。自己の体型をどうとらえているかという主観的な評価は、「ふつう」と評価している者が、小学生、中学生とも4割と最も多く、次に「少し太っている」「太っている」を合わせると、小学生32.4%、中学生26.1%であり、小学生の方が太っていると評価していた。実際のローレル指数と比較すると、小学生も中学生も7~8割の者が標準、やせ気味であるにもかかわらず、約3割が「やせたい」「すごくやせたい」と希望し、自分の体型に対して正しく評価できていないことが伺える。また、中学生よりも小学生に多いことから、やせ志向が低年齢化しているといえる。生野<sup>18)</sup>は「体重が気になる」と答えたのは、小学生の女子73%・男子40%、中学生、高校生以上では女子78%・男子48%であった。また、「やせたい」と答えたのは小学生でも女子59%・男子25%と報告しており、本研究のやせたいという希望と同様な傾向であった。

次に、やせ志向と学年全体および小学生のそれぞれのローレル指数とやせ志向との関連では、「否定感」と強い関連がみられたが、中学生ではみられなかった。



小学生に体型への「否定感」と関連がみられたのは、思春期の始まりの低年齢化をあげることができる。また、抽象概念の操作が可能になるなど認知機能の発達も相まって、自己を対象化し始める時期でもあり、「見た目」のこだわりを認識しはじめる時期でもあることが関連していると思われる。そのため、小学生の方に否定感が強くみられたのではないだろうか。一方、中学生は1年から2年にかけて身体への意識が高まり、高校・大学と学年が進むに連れて現実の体型と理想の体型が一致してギャップがなくなることから実際の口-レル指数と体型への否定感に差がみられなかったのではないかと推測される。

## おわりに

今回は、思春期男子のやせ志向尺度の作成を試み、それに関連すると思われるいくつかの要因について検討した。全体的には女子と同じような傾向ではあったが、やせ志向が女子だけではなく男子にもその傾向があり、それが低年齢化してきていることである。また、やせ志向の中で体型への否定感が、やせ願望や自尊感情、体型の認識などに密接に関わっていることが明らかになった。しかし、思春期にある子どもたちがやせたいと思う背景は単純なものではなく、子どもたちを取り巻くさまざまな要因が複雑に関連していることも推測される。今後は、これらの結果を踏まえ、発達過程にある子どもたちがより健康的な生活を送ることができるような保健教育を進めていきたい。

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、調査に快く応じてくださった小学生、中学生のみなさん、ご多忙中にもかかわらず、調査項目の検討、調査用紙の配布と回収を引き受けてくださった5校の校長先生方をはじめ諸先生方に厚くお礼を申し上げます。

(本論文の要旨は第25回日本思春期学会にて発表した)

## 参考文献

- 1) 健康教室 特集 平成14年度学校保健統計調査

速報. 2003; 3: 6-31.

- 2) 池田かよ子 思春期女子のやせ志向と自尊感情との関連. 思春期学 2006; 24(3): 473-482.
- 3) 金子隆芳・台利夫・穠山貞登 多項目心理学事典. 教育出版 1996; 58, 116.
- 4) 桜井茂男 子どものやる気と社会性. 東京: 風間書房; 1990 186-279.
- 5) 馬場安希, 菅原健介 女子青年における瘦身願望についての研究. 青年心理学研究 2000; 48: 267-274.
- 6) 伊藤裕子. 第8章 生まれながらにして男であり女であるのか. ベーシック現代心理学 青年の心理学(改定版). 東京: 有斐閣; 2002. p123-138.
- 7) 鈴木幹子, 伊藤裕子 女子青年における女性性受容と摂食障害傾向 - 自尊感情, 身体満足度, 異性意識を媒介として -. 青年心理学研究 2001; 13: 31-46.
- 8) 齋藤誠一 第1章 青年心理へのアプローチと課題. ベーシック現代心理学 青年の心理学(改定版). 東京: 有斐閣; 2002p 31-35.
- 9) 深谷昌志 中学生の悩み モノグラフ 中学生の世界. ベネッセ教育研究所2001; 70: p63-79.
- 10) 深谷和子 小学生に増える「痩せ願望」- ストレスとの関連か -. Kellogg'sUpdate 日本ケロッグ株式会社 2002; 61: p2-72.
- 11) 生野照子, 坪井康次, 片桐一枝 特集「座談会・摂食障害を考える」. 思春期学2006; .24(3): p449-464.
- 12) 丸野俊一 9 児童・青年期における自己と社会. 発達心理学. 東京: 放送大学教育振興会; 1999 p94-115.
- 13) 松橋有子 思春期の保健. 小児科臨床1997; 50: p 1329-1336.
- 14) 梶田叡一 自己意識の心理学. 東京: 東京大学出版会; 1980.
- 15) 齋藤誠一 身体像. 青年心理学事典 東京: 福村出版; 2000 p89.
- 16) 片山美香, 松橋有子 思春期のボディイメージ形成における発達の研究 - 中学生から大学生までの横断的検討. 思春期学2002; 20(4): p480-488.
- 17) 及川研 子どものダイエット. 児童心理東京: 2002; 56 p106-112.
- 18) 生野照子 無理なダイエットによる健康障害. 健康教室 200; 38: p12-17.

